

De Gaulle et le Québec

Reviewed by Masaharu Nakamura

BOOK REVIEWED: D. C. トムソン著『ド・ゴールとケベック』, Dale C. Thomson, *De Gaulle et le Québec*, (Saint-Laurent: Editions du Trécarré, 1990, 410p.)

1967年7月24日20時頃、モントリオール市役所前のジャック・カルチエ広場は大群集で埋まっていた。前日巡洋艦コルベールでケベックに到着して以来、市民から熱狂的な歓迎を受けてモントリオール入りしたド・ゴールフランス大統領は、市役所での歓迎式に臨んだのである。市役所ではモントリオール各界の名士達との交歓が予定されていただけであったが、広場を埋めた市民の歓呼の声に応じてド・ゴールは急遽バルコニーに立つことになった。

ド・ゴールは演説の中で、ケベックの進歩・発展すなわち困難な状況からの解放の努力を称え、今やフランス人は「カナダのフランス人」(フランス系カナダ人ではない!)に対して協力の手を差し伸べなければならぬと感じており、そのためにケベック政府といくつかの協定を結んだと述べた。そしてまたド・ゴールは、将来ケベックがフランスを助けてくれる日が来ることを確信しているとの期待を表明してから、いつも演説の終わりでそうするように、「モントリオール万歳!ケベック万歳!」と続けた。群集の中に散らばるケベック分離主義者達はプラカードを打ち振り、ド・ゴールに最後の言葉を促している。「ド・ゴールがプレストの港を発って以来待っていた瞬間—いやそれ以前から待っていた瞬間—が訪れたのである。[...]『ケベック万歳』、そして息を継いでから『自由な!』と叫んだ。言葉は発せられた。群集はしばし茫然自失となり、ついで歓喜の声がまき起こった。」(pp. 262-263)

D. C. トムソン (マギル大学教授) の『ド・ゴールとケベック』は、

ド・ゴール大統領の引き起こしたこの「バルコニー事件」の顛末を中心に、第二次大戦以来のフランス・カナダ関係の展開を描いたものである。トムソンは関係者の著作や回顧録、あるいは外交文書やマスメディアの資料はもちろんのこと、関係者に対する長時間にわたるインタビューの結果に依拠してこの「スキャンダル」を再構成している。その際著者はこうしたエピソードをフランス・カナダ関係史の流れの中に位置づけることにより、同事件の単なる記述に止まらず、もっと広く同事件がカナダ政治に対して与えた影響の観点から分析を試みている。ド・ゴールという強烈な個性を「狂言回し」として1960年代におけるカナダ連邦政府、ケベック州政府、フランス政府の三極構造を描き、それにより本書の本当の主題である連邦体制をめぐるオタワとケベックの確執を浮かび上がらせる手法を採っている。

順を追って簡単に内容を紹介してみよう。第1章「人物」ではド・ゴール将軍の略歴と共に、その人格・思想の形成過程などが簡潔にまとめられている。ド・ゴールは矛盾するとも見える二つに性格の持ち主である。冷徹で、必要に応じては敵を計略に陥入れることも辞さない戦略家としての傾向と、カリスマ的魅力を持つデマゴークとしての傾向である。こうしたド・ゴールの性格の二面性が「バルコニー事件」の謎を解く鍵となろう。

第2章「ド・ゴール以前のケベック」では、1763年にヌーヴェル・フランスがイギリス植民地になって以来の歴史を略述している。そして1世紀後の普仏戦争当時の頃までには、フランス系カナダ人の祖国フランスに対する心理的絆は切れてしまったことが明らかにされる。

第3章「自由フランスとカナダ」、第4章「サン・ピエール・エ・ミクロン」、第5章「ド・ゴールはカナダを発見する」の3章では、ヴィシー政府に対抗してレジスタンス運動を指導したド・ゴールが自らの運動の正統性を英米両国に認めさせようとして苦闘するさまが描かれている。ド・ゴールの対英米不信感はこの時代に形成される。

第6章「ド・ゴールはカナダのフランス人と再び関係を結ぶ」では、1958年に政権の座に復帰したド・ゴールは1960年4月に第3回目のカナダ訪問を果すが、この時点ではまだフランス系カナダ人問題はド・ゴールの関心を引いた様子はない。

第7章「ド・ゴールと静かな革命」、第8章「フランス・ケベック関係の強化」、第9章「緊張激化」では、1960年のルサージュ政権の成立以来ケベック社会に起った変化について述べている。また同時にパリ

のケベック代表部開設の試みに見られるように、ケベックの連邦政府の外交権に対する挑戦の様子が描かれている。ピアソンの連邦政府の側でも、この時期フランスならびにフランス語圏アフリカ諸国との関係強化を目指すようになり、ケベック州政府との間で先陣争いを演じることになる。1965年2月にフランス・ケベック間に文化協定が結ばれると、フランスはケベックとの関係を優遇し、カナダ政府を粗略に扱うなど、フランスは露骨にケベック・ナショナリズムに肩入れするようになる。

第10章「自由ケベック万歳!」、第11章「失態あるいは挑発」、第12章「攻撃と反撃」、第13章「アフリカをめぐる闘い」では、冒頭で紹介した「自由ケベック万歳!」というケベック分離主義者のスローガンがなぜド・ゴールの口から発せられたのかの謎解きと、オタワ・ケベック・パリ間の外交ゲームの様子が詳述される。ゲームに賭けられているのは、オタワにとっては連邦政府による外交権の独占であり、ケベックにとっては州権の拡大とフランス系カナダ人の地位の上昇(=わが家において主人になる)である。またパリにとっては、ド・ゴール流に言えば、アングロ・サクソンの世界支配に対する反抗の場としてのケベック州への支援と、それを通じての国際舞台における「フランスの偉大」の実現である。

「バルコニー事件」の真相については、著者のトムソンは予定された行動説も単純な失言説のいずれも採らない。彼の解釈は巧緻なものであり、答えをド・ゴールの性格の二重性に求める。ド・ゴールの発言はあらかじめ準備されたものというよりは、その場の雰囲気によって出てきたものである。しかしそれは全く突発的なものでもなかった。ヌーヴェル・フランスを見捨てたルイ15世の罪の償いの気持、アングロ・サクソンに対する対抗心、フランスの偉大さの回復など、ケベックを核として徐々に醸成されてきていた観念が歓呼して迎える群集を前にした時自然に溢れ出し、具体的な言葉になったとするのである。

第14章「結論」においては、ド・ゴールの行動の影響について論じている。著者はド・ゴールという人物を好意的に描き、ド・ゴールは現状のカナダの政治システムに揺さぶりをかけることによって、フランス系カナダ人に対して自己の民族的要求の追求に向かわせようとしたと解釈している。しかしド・ゴールの行動は、連邦主義者の側の譲歩—二言語・二文化主義(多文化主義)に代表されるフランス系の地位の尊重の実現、また州権の拡大を意図する憲法改正の試みなど—

を引き出すことになり、そのことによりかえってド・ゴールの意図に反してカナダ連邦制の強化に役立ったと結論づけている。

トムソンの結論は一応納得のいくものであるが、ケベック民族主義者の主張は連邦形成期の「ルージュ」の州権確保の要求に連なるものであり、カナダ連邦制度が本来的に持つ困難性を表しており、その意味で容易に解消されるものとは思われない。1982年の憲法改正から1990年6月のミーチ・レイク合意の批准失敗の過程を見る限り、連邦の権限の正統性に対する各州の挑戦は今後も続くと考えないわけにはいかない。

トムソンの分析に対して一つだけ不満を述べたい。本書の著者は、ド・ゴールのケベック民族主義支持の理由としてアメリカの文化的侵略に対するド・ゴールの危惧感を強調するが、その際ド・ゴールの反アメリカ主義の理由について、第二次大戦時の経験しかあげていない。しかしド・ゴールの反アメリカ主義は彼の国際政治戦略との関連からも論じられなければならないだろう。すなわち62年のキューバ・ミサイル危機以降、西側同盟内におけるアメリカのヘゲモニーに対するフランスの挑戦がフランスの国際的地位の上昇を狙って試みられたことを忘れてはならない。イギリスのEEC加盟拒否と英米両国提案の多角的核戦力(MLF)の受け入れ拒否(1963年)、中国承認(1964年)、NATO脱退(1966年)といった一連の外交攻勢の枠組の中にケベック問題＝北米大陸における「フランス的事実」の防衛を位置づける視点も必要であると考えられる。

トムソン教授はカナダの内政・外交問題の専門家であり、またケベック問題についての著書もあり、本書の主題を扱うのに最も適した人物であるといえよう。本書は1960年代のカナダ・ケベック・フランス関係史に関する第一次資料的材料も多く提供してくれる。ド・ゴール大統領、カナダ連邦制度、あるいは、ケベック・ナショナリズムの問題などに関心のある人々に本書の一読を薦めたい。

(Masaharu Nakamura: Associate Professor of French Politics, Sophia University, Tokyo)